

刀 吳服山富士太郎則利
 弟陸 天和

「越中国吳服山住則利」

「越中郷則利十六代末富士太郎則利」

「藤太郎則利」

川谷甚衛門。

水戸光圀に抱えられ水戸藩工となる。

平成二十七年六月十九日

鑑定刀

刃長 72.5cm (二尺三寸九分三厘)

元重 0.85cm (0.71cm)

茎元巾 2.9cm 茎先巾 1.56cm

鑄造、庵棟低く鑄巾は広く鑄高は尋常、重ねは厚めで身中の尋常は造込みとなり、切先は中切先でフクラは尋常、反りは

中間反りが浅めでやや光反りがつき身元にやや踏張りのついた刀姿となる。

地鉄は大板目に至目を交じり地帯がついて肌立ち、肌に添って太い地帯が表われた繁慶のヒジキ鉄を彷彿とさせる鍛て

地色は黒味がかる。

刃文は湾れに互の目、所々前線刃や尖り刃を度々、肌にかうんで、金筋・砂流しを交じり之に向かつて循環となる。

刃中は足がよく入り、柄は深く句口は明ら。

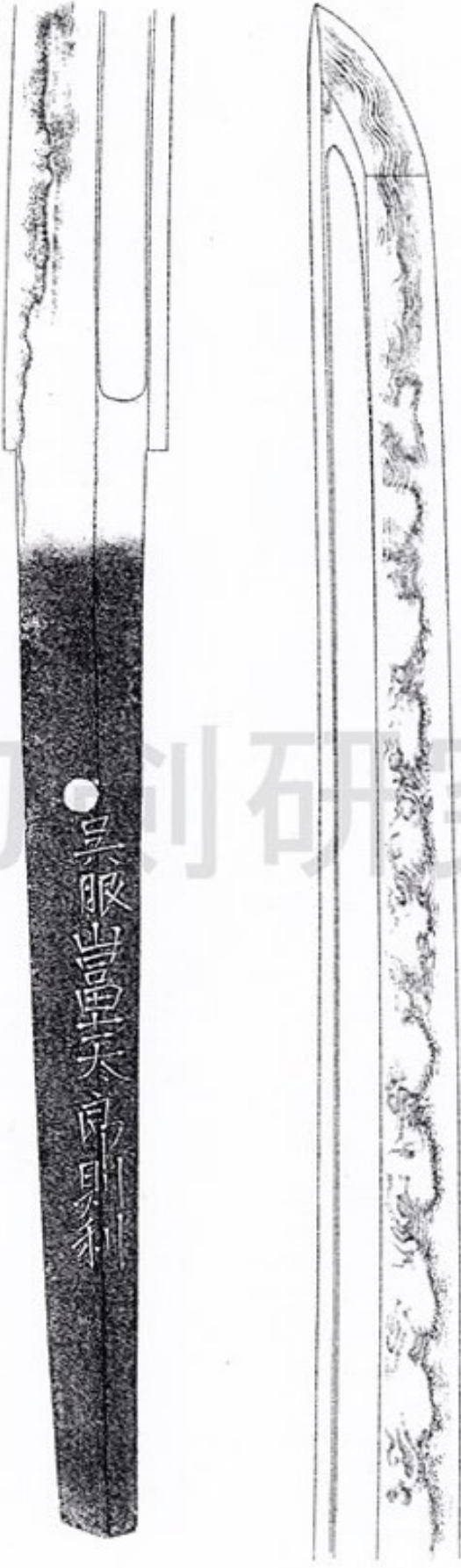
帽子は丸れ、肌からんで掃けて返る。

彫刻は表裏に丸正めの押通を添く。

茎はおよそ5cm程区を送る。鑄巾・鑄高は尋常で寸は長く、茎底は入山形、刃前リ

棟前小間 (鑄は化粧鑄、磨出しは切で下は筋直)、目釘穴はやや下方に(太刃の位置)。

銘は鑄筋にのせて表銘を細整て切る。地鉄と刃文は変化に富み、尚句は明るく見事。



● 吳服山富士太郎則利

刀剣研究會

刀 常陸笠間士高木源正行

明治三年八月日

常陸 慶応

「常陸國住高木源正行作之」

「若陽笠間士高木源正行」

高木 幸吉、のちに源三郎。

文化二年田上村の野鍛冶保坂

源兵衛の子として生れ、片庭の

鐘鍛冶高木安治の女婿となる。

笠間藩主松野貞明に抱えられ

番工となる。手柄山正繁に鍛刀

と学ぶこと。う。明治四年隠居。

明治二十三年一月十五日没、八十六歳。

平成二十七年六月十九日

刃長 71.0cm (二尺三寸四分三厘)

元重 0.77cm (0.77cm)

茎重 2.77cm 茎先巾 1.49cm

錫造、庵硬葺常、錫巾は狭めて錫は低く、重ねは厚く肉のたつぶりといった身中の広い造込となり、元巾と先巾の差は

少なく、切先は中切先がやや延びてフクラは漲る。反りは中間反りが浅く、持ち重りのする刀姿。

地鉄は小板目が持によく約んだ所謂鏡鉄で、鉄色は青味かかり、透きとおるようになり、匂口は明るく湧いて所々湯がつく。

があり、細かな雁渡を焼く、刃中は足、葉よく入り金筋・砂流しを交じえる。匂口は明るく湧いて所々湯がつく。

柄字は考れて先は丸く返る。彫刻は表裏に樋先の下がった種樋に希樋を掻く、表は丸止め裏は茎先まで掻き通す。

至は生ぶ、錫巾・錫高は葺常、長寸で浅く反り、茎尻は刃上り栗尻、刃角り、棟前小肉、銘 表は

錫は化盛錫、磨出しは切で下は大筋造、目釘元はやや下方に(太刀の位置)。一。銘 表は

錫筋にかけながら錫地に長銘を切り、裏は目釘元の下から平地に製作年記を切る。

正行の作風を窺ううえでの貴重な資料で、地・刃は明るく湧える。

鑑定刀

反り 0.98cm (三分二厘)

先重 0.55cm (0.50cm)

切先長 4.08cm

茎元重 0.79cm (0.75cm)

茎先重 0.42cm (0.37cm)

元巾 3.23cm (3.03cm)

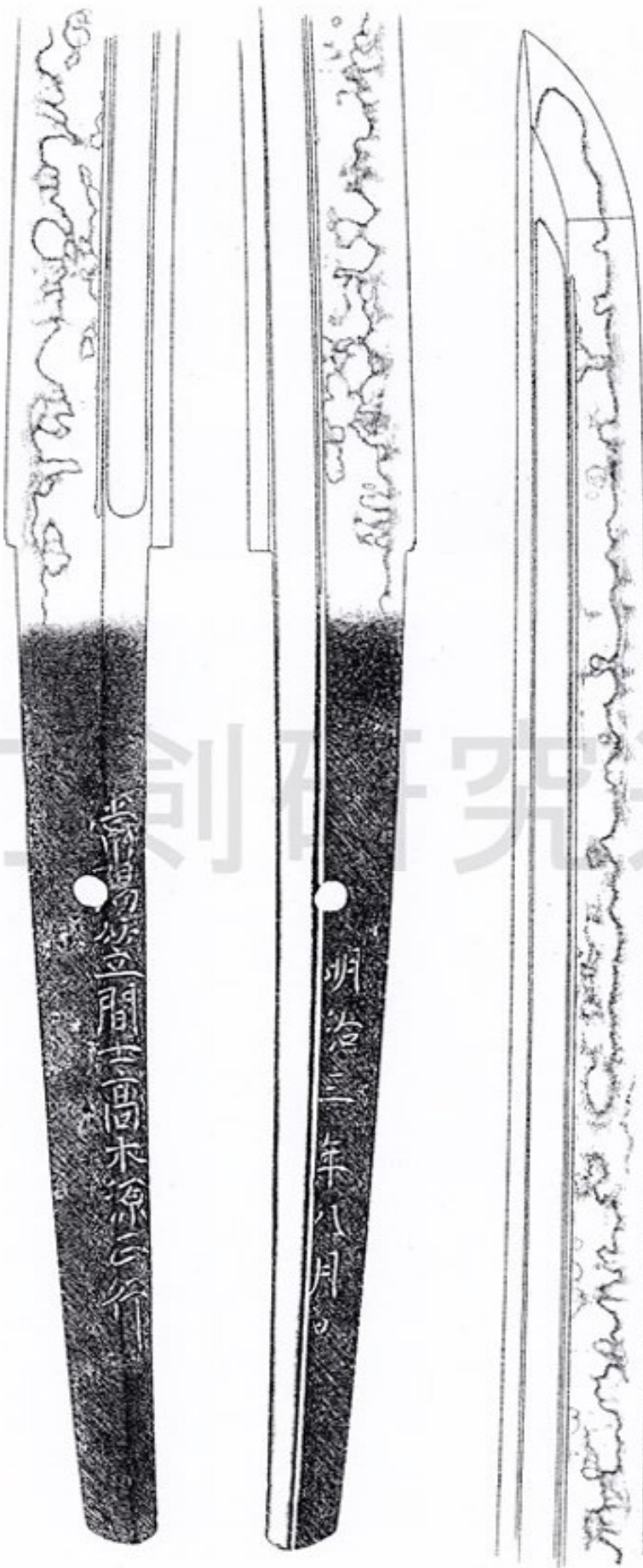
先巾 2.24cm (2.08cm)

切先重 4.08cm

茎長 20.9cm (21.3cm)

茎反り 0.7cm

刃角り



刀 兼常作

兼常には年秀を切つたものが少なく、俗名や安鎖名を切つたものはさらに少ない。
二字銘が多く同一年代で異なつた銘振りの作刀が見られ、同時代に数人の兼常が存在したものとおもわれ、識別は困難を極める。
本刀は天文頃の兼常の可能性が高い。

美濃 天文

「兼常」漢州肉住兼常山由住兼常元次

「漢州肉之住兼常」

兵三郎、後に納戸助右衛門、武藤兼常家の

祖。元龜二年(一五七)七月、田信長より

鍛冶職安堵の朱印状を賜り、向鍛冶給領事

と打す。天正頃肉に千手院を建立。

天正十六年(一五八)十月没。

法名千手院殿天羽元次庵主。

平成二十七年六月十九日

刃長 70.0cm (二尺三寸一分六厘)

元重 0.71cm (0.71cm)

美重 2.74cm 美先中ノ方

鑄造、巻陳低く、鍋巾は狭めて鍋は低く、

造込升となり、切先は中切先でフアラはヤヤ結れる。

ついた、堂々とした刀姿に匹敵する。

此景が沈む。映りは差表の鍋筋の近くに突く表われ、鉄色は青黒く、よく練れた力強い鉄となる。

刃文は直刃には立てた小互の目で、滑々尖刃を交じえ、刃中足、葉よく入り、中程より後手に向かって湯がっさ、匂口は水々しくヤヤ沈みかけん。

帽子は乱れてよく湯え、先は小丸に返る。

彫刻は表裏に丸止めの棒樋を控く。

茎かについて刃方が張り、短寸で頑丈、茎尻は刃上り愛尻、刃角小肉。

棟角わずかに小肉、鏡は鷹羽で細かく浅い。目釘穴は一、銘は鍋地に独特の書風で三字銘を切る。

湯ちつさのあるよく練れた地鉄は強く美しく、刃文の匂口は風格がある。此、刃連金で木束も浸れている。

鑑定刀

反り 2.07cm (六分八厘)

先重 0.46cm (0.46cm)

美重 0.74cm (0.74cm)

切先長 3.64cm

美先重 0.49cm (0.49cm)

美先中 2.66cm (2.66cm)

元中 3.23cm (3.23cm)

先中 2.66cm (2.66cm)

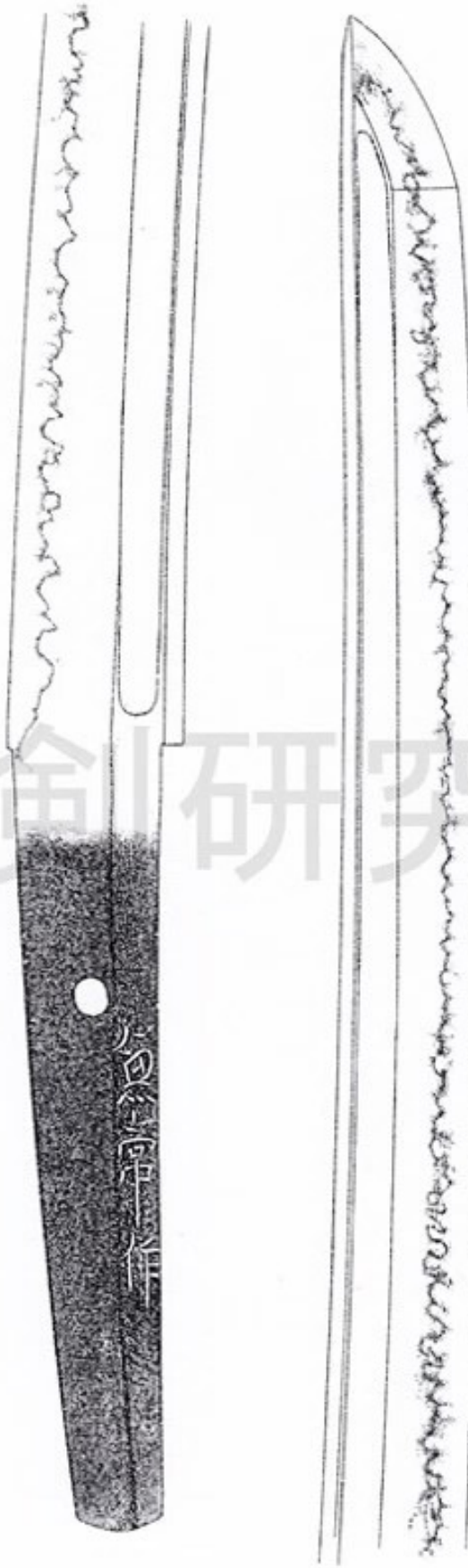
美先重 0.49cm (0.49cm)

美先中 2.66cm (2.66cm)

美先重 0.49cm (0.49cm)

美先中 2.66cm (2.66cm)

美先重 0.49cm (0.49cm)



刀劍研究會

脇差 越後守藤原未金道

山城 慶長

「越後守藤原金道」

藤原未金道

「越後守藤原未金道」

兼道 次男

三品家系圖に文祿四年(一五九五)十二月

七日初家守を全領とある(和泉守

は二代未金道で越後守を全領の誤り

であろう)。

慶長五年(一六〇〇)十二月七日没。

平成二十七年六月十九日 鑑定刀

刃長 52.4cm(一尺七寸二分九厘)

元重 0.68cm(0.66cm)

茎重 2.73cm 茎先中 1.45cm

鎬造、庵棟低く、鎬中・鎬高は尋常で身中の広い造込みとなり、切先は中切先が延びて大切先に近くフクラはやや枯れる。


反りは中向反りにやや先及りを加えた文祿・慶長頃の新古境の姿になる。

地鉄は小板目に小歪交じりによく均斉、細かな地沸が厚くつき、鎬地は板目が征に流れる。軟らか味のある明る、鉄。

刃文は汚れに互の目で表裏の刃が揃い、刃中は足・葉よく入り金筋・砂流しを交じえる。匂口は締りかけんで沸かつき明るく湧える。

帽子は浅く汚れて尖りかけんに返る(三品帽子)。表の先は刃方にやや俯く。

茎は生ぶ、鎬中・鎬高は尋常、寸は短かく刃方を張りせかけんに先を細め、茎尻は刃上り葉反、刃角は

鎌角「」 纏は筋違、目釘孔は二、銘は鎬筋にややかけながら、鎬地に強持の書風で長銘を細整て切る。

越後守金道の遺例は少なく、資料として貴重、本脇差の地・刃は健やかでその出来は素晴らしい。

反り 1.28cm(四分二厘)

先重 0.57cm(0.48cm)

茎重 0.70cm(0.60cm)

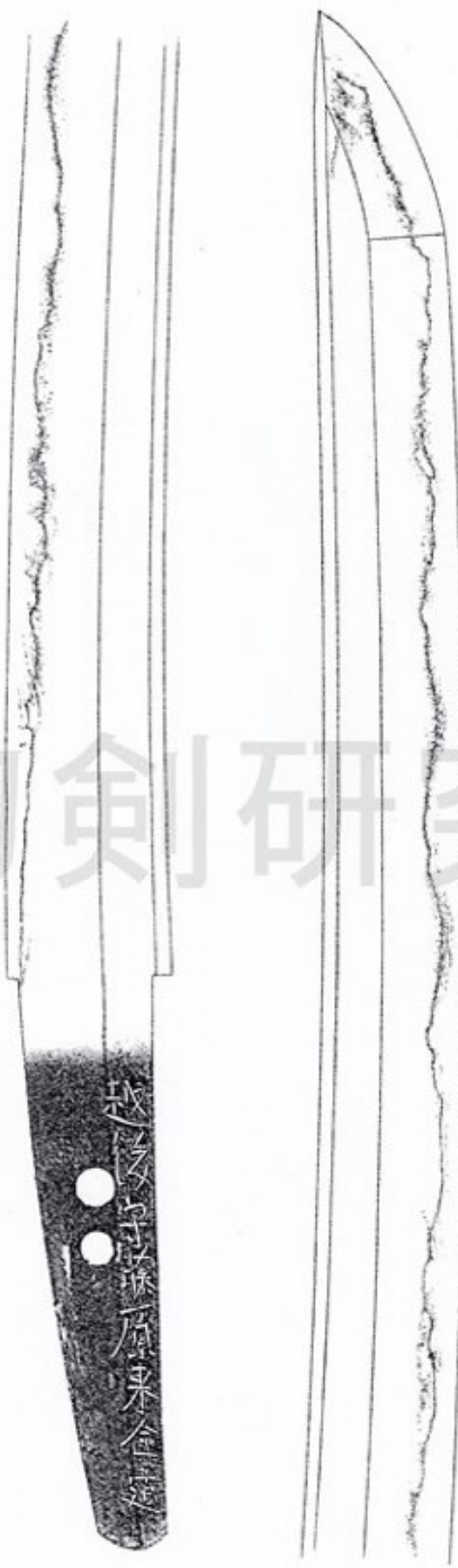
元中 0.67cm(0.65cm)

切先長 4.83cm

茎長 1.5cm(1.4cm)

茎反り わすか

先中 2.48cm(2.36cm)



刀剣研究協会

脇指

出雲大塚藤原吉武

長谷川氏重(河持之劍)一胴、磨付、切落

山城 延宝

「平安成住出雲大塚藤原妙吉武」

「出雲大塚藤原吉武」

「出雲守法哲公道吉武」

孫川。

川手甲太夫。

孫川國武の子、三条吉則の末裔と稱す。

江戸へ移住し元禄七年(一六九四)五月没。

堂業物。

平成二十七年六月十九日

鑑定刀

刃長 40.6cm (一尺三寸三分九厘)

元重 0.67cm (0.64cm)

茎元重 0.67cm (0.64cm)

錫造、磨棟高、鍋中は広く鍋は低く、重ねは厚めで身中の広い、刃肉のついにガツンリとした造込刃となり、先中も広く切先は大四先でフクラは結れる。反りは中肉反りが浅く堂々とした小脇指の姿となる。

地鉄は小板目に小歪を交じえて細かく肌立ち、微塵の地沸が厚くつき細かな地景が肌に乗って表わた、明るく強い見事な鉄。刃文は互の目、顔の丸い互の目がいくつか集まって一つの乱れを形づくり、所々裾渡を交え、焼出しは直刃で短かく強く、刃中は湯足がよく入り、匂口は明るく刃える。帽子 表の先は尖りサゲんに返り、表は一枚に近い、本刃と同様に乱れて湯・匂は深く明るい。彫刻は表裏に値先のヤヤ下がり、両サゲりの降値を深く大きく外に擦通す。

反り 0.55cm (一分八厘)

先重 0.54cm (0.54cm)

元中 3.32cm (3.2cm)

先中 2.92cm (2.81cm)

切差長 8.76cm

茎長 14.5cm (13.7cm)

茎反り 無し

標角 「」 縁は化藍焼、磨出しは勝手下り下は大筋達し、目釘穴は二、

吉武 傑本の一振りて此、刃健全。



長谷川重

明暦三年(一六五七)四代將軍家綱に

初見えし、元禄七年(一七〇八)伊勢

山田奉行、享保四年(一七二九)上坂

藤本の席である寄合となる。

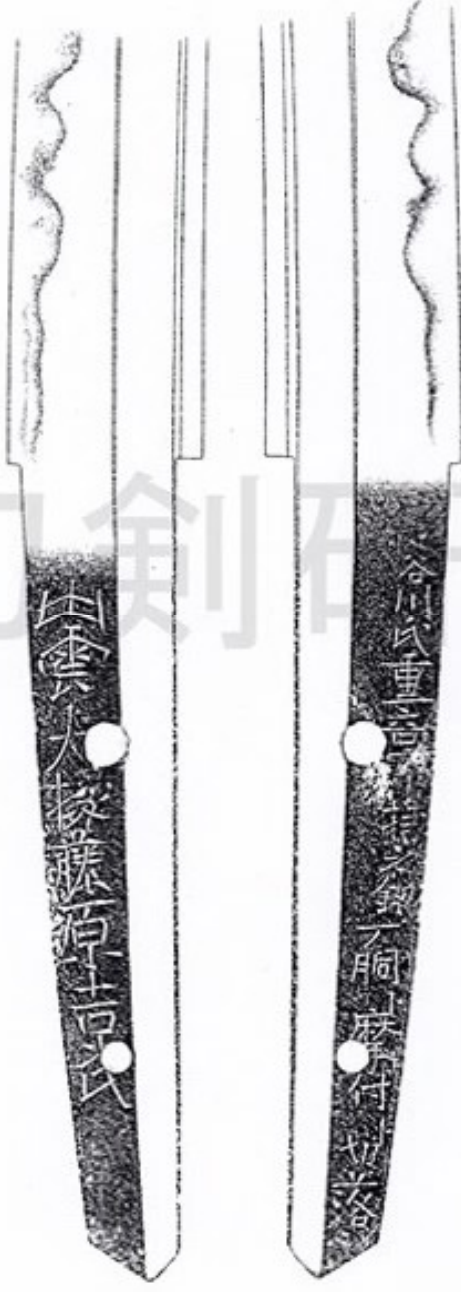
享保十四年に隠居を申し出て、

享保十六年、八十五歳で没。

神社・仏閣へ多くの寄進を行う。

代々幕府の要職を務める。

三一〇五



刀剣研究會